

ヲドリ 踊 ↓カブキ 歌舞伎。  
ヲナガ 尾長 羽咋郡呂知院内尾長保に屬する部落。

ヲナガテ 尾長出 羽咋郡尾長の内の小字。

ヲナガビシヤモンドウ 尾長里沙門堂 大永六年十月一宮社務職年貢米錢納帳に『六十

羽咋郡尾長村にあつたのであらう。

ヲナガホ 尾長保 羽咋郡に在つた。承久三年注進の能登國田數目録に、『尾長保、拾參町七段貳無番、承久元年檢注田定』と見える。後世亦尾長保の名を存する。

ヲナガホ 尾長保 羽咋郡内に屬し、群しくは呂知院内尾長保といひ、藩政時代では、堀替新・尾長・千田・菱分の四村を含んで居た。この内菱分は天保十四年の新開である。

ヲナバラ 女原 ↓ヲンナバラ 女原。

ヲノ 小野 能美郡德橋郷に屬する部落。

ヲノ 小野 河北郡五ヶ庄に屬する部落。

ヲノガマ 小野鷲 能美郡小野の農政六右衛門は、製陶を本多貞吉に習ひ、文政二年初めて厩村に窯を起し、天保元年鍋谷に磁石を發見してから、良質の磁器を製出することになつたが、十二年一針村の善太夫が之を讓受けて經營した。然るに善太夫は十數年の後業を廢したので、六右衛門は又奮起し、養子吉右衛門に製陶せしめ、明治五年八十三歳で歿した。後小野附近に陶窯の連りに起つたのは、皆それに倣うたものである。

ヲノキサモン 小野木左門 寶曆七年父助進の遺知百石を襲ぎ、定番御馬廻組に班したが、天明五年十一月出奔し、十二月越前福井で捕へられ、揚屋に收容せられ、六年五月二

日五ヶ山に流された。

ヲノギヒロシゲ 小野木廣重 通稱治兵衛。寛永三年前田利常に仕へ、祿三百石を受け、後更に三百石を増し、大小將番頭・御先手物頭・小々將殿許に任じ、延寶五年歿。子孫世世藩に仕へる。

ヲノギユキツネ 小野木之庸 通稱吉次・六郎左衛門・助三。明和八年父大吉之武の遺知百五十石を襲ぎ、御馬廻組に班し、文化八年二ノ丸御式御用達となり、祿百石を加へ、十四年歿した。之庸の女は前田齊泰の生母で、後に榮操院といはれた。

ヲノギユキヤス 小野木之安 通稱儀六郎。文化十四年十二月父助三之庸の遺知二百五十石を襲ぎ、會所奉行となり、文政四年八月更に二百五十石を加へられた。

ヲノサキ 尾の崎 珠洲郡懸路の東に在る岬角。

ヲノジ 小野寺 白山五院中の一に小野坂とあり、源平盛衰記に小野寺林といふものは、共に小野寺の所在を指すものである。今江沼郡極楽寺村の東から高尾村に赴く山路を小野坂というてゐる。寺院は斷絶したが、高尾村の産土神に白山の小祠あるものは、この寺の鎮守であつたらうといはれる。

ヲノタニ 尾谷 タノ 石川郡大平澤南方の溪谷で、その水平澤川となり、内川に注ぐ。

ヲノオホイケ 小野の大池 河北郡深谷に在る。龜尾記に、深谷の奥に小野の大池があり、葦菜を産するが、藩侯の食膳に供する爲獵に探ることを得ぬとある。

ヲノマチ 小野町 能美郡千代の内の小字。

ヲノマツリ 荻祭 羽咋郡氣多神社に舊時

行はれた祭儀で、一に男敵とも言つた。三月四日石動山の僧三人、笈負一人、斧持兒二人當社に詣で、中門殿に於いて七日の別齋を爲し、神前に斧を持ちて舞ひ、又護摩を焚く例であつた。之を柴燈の護摩といふた。

ヲバタウキヨウ 小幡右京 父九兵衛は越中の人。右京は、前田利常の生母靈福院と所縁あるを以て召出され、采地漸く増して一萬石に至り、寛永十一年歿した。嫡子下野七千石を繼いだ。早世して家斷絶し、養子右京は三千石を配分せられて、その後長く傳はつた。

ヲバタウヘエ 小幡右兵衛 駿河の弟。天正十八年前田利家に仕へて千五百石を受け

た。子孫長く藩に仕へる。

ヲバタエイカン 小幡永閑 連歌師で陽日齋と號する。その生母が能登の人であつた爲、幼時同國に下り、後にまた白山義總に招かれた。嘗て源氏物語を抄して萬水一露廿八卷を著し、また伊賀名所記一卷を出した。後者はもと山城・大和と共に三冊とし、各その名所を列擧して簡潔なる考證と和歌とを記したものであるが、他の二書は傳はらぬ。永閑は小幡氏であるといふが、永原氏とする説もある。前田綱紀の桑華字苑に、『能登永閑事、萬水一露。長頭丸殿に、宗領法師門人能登永閑云々。能順云。能登永原永閑者、白山農家禮、宗領弟子、源氏物語萬水一露之作者。死去之時節不存、七尾校合にては無之。私云長頭丸は貞徳也。』とあるものは、能順は柳天神社の別當である。

ヲバタシモツケ 小幡下野 右京の子。祿七千石。寛永十六年前田利常の小松隠棲に従

ひ、三谷に居たが、寛文二年八月十四日早世して家斷絶した。

ヲバタスルガ 小幡駿河 上野國峰城主小幡尾張守の孫で、父を彈正といふた。駿河は前田利長に仕へて七千石を領し、大坂の役にも従つた。駿河の子は播磨といひ、父の祿を襲いだ。が、播磨の子は石動山の僧となつて家斷絶した。

ヲバタソウセキ 小幡宗碩 宗祇門下の連歌師で月村齋と號した。その繼母が能登の人であつた爲、異母弟永閑と共に能登に來たり、生國河内に往つたりしてゐた。宗碩發句帳には『元日能州にて、珠洲の海の春や神代の朝ひらけ』十月一日能登にて、秋ぞみん昨日にしあらは今朝の雪』賀州にて、谷さむみ雪をならぶるいらか哉』の句があり、岸芷の著した都の花めぐりには『永正九年十月のどの國氣多神社にて、八雲たつみ空やこし路ゆきしぐれ』のと菅原天滿宮御靈夢二句、國々のさう見るむめの若枝哉。まもれ口國の光りもきよき哉』の作が見える。

ヲバタツノフ 小幡立信 通稱左京・宮内。長治の嫡男。父歿後其の祿一萬六百五十石(内二千四百三十石與力知)を襲ぎ、殘三百石は叔父又助長旨に配分した。元祿中火消役。神護寺請取火消に歴任したが、寶永三年十一月十六日狂を病んで祿を褫はれ、正徳元年歿した。但し十一月十九日その子左京爾清新知二千石を受けて、絶炊せざることを得た。

ヲバタナガツク 小幡長次 通稱宮内、小幡九兵衛の次子で、前田利常の生母靈福院と義兄弟である。慶長の末前田利常に仕へて小將となり、次いで祿三百石を受け、大坂陣